平成 28 年度「土砂災害防止に関する絵画・ 作文」作文小学生の部 優秀賞（事務次官賞）

「 身近な災害 」

広島県 東広島市立小谷小学校 6年 荒木（あらき） 優花（ゆうか）

町に流れこんだ雨水と、くずれた山々。

平成二十六年、八月二十日。大雨が原因で、広島市安佐南区は、土砂災害にあいました。

あの日、テレビでは、特に被害が大きかった安佐南区八木地域のニュースでいっぱいでした。八木地域にある梅林駅は、線路も土砂でうまり、山あいに建っていた団地や家は土砂に流されて、あとかたもなくなりました。そこに住んでいた人たちは、命からがら小学校などのひなん所にひなんしていました。

私は、その様子をニュースで見ておどろきました。でも、その八木という所をよく知りません。以前起きた東日本大震災のように、どこか遠い場所のように感じられました。自分にあまり関係ないと、正直、他人事みたいに思いました。でも、私と一緒にテレビを見ていたお母さんが、

「昔、この八木に住んでいたことがあるんよ。」

と言って心配そうな顔を見せた瞬間に、私の気持ちは少し変わってきました。お母さんの話でこの広島市の災害を、身近に感じられるようになったのです。

それは、私が生まれるずっと前、結婚したばかりのお父さんとお母さんは、八木のアパートに住み始めました。そのアパートは、今回大きな被害が出た、八木三丁目の近くだったそうです。

何年かたって、お父さんとお母さんは八木のアパートから、今住んでいる東広島の家に引っこしました。そして、後に、お姉ちゃんと私が生まれました。

もしも、お父さんとお母さんがそのまま八木に住んでいたら、私たち家族は、この土砂災害にあっていたのかもしれません。水道も電気もガスも止まって、不自由なひなん生活をしいられていたでしょう。

災害とは、いつでもだれにでも起こり得ることなのです。

そして、今年の春、熊本県をはじめとした九州地方で、震度7の地震が起こりました。その地震では、熊本城などの文化財が被害にあいました。被害にあった人たちの中には、今も、ひなん生活をしている人もいます。

私はスーパーで買い物をした時、店に置かれている募金箱に、募金しました。募金した後、他に私たちに何ができるのか、自分自身に問いかけました。自分なりに一生懸命考えた答えは、これから起きる色々な災害に備えて、被害を最小限におさえる事でした。例えば、学校の防災訓練に真けんに取り組むことや、地域のハザードマップを見たり作ったりすること。日頃から地域の人と仲良くすることや、連絡が取れない時に家族と会う場所を家族と決めることです。

家庭では、水や保存食、懐中電灯、救急箱などを準備し、いつでも持ち出せるようにしておくことが大切です。ふだんから防災に備えておけばいいと思います。

土砂災害から一年たったある日。私と家族は広島市内に用事があったので、安佐南区をおとずれました。町の復興は進んでいましたが、山は災害の爪跡が残っていました。心配だった八木のアパートは幸いにも元の場所に建っていました。私は、なんだか安心しました。